



TITLE:

歸朝の挨拶 (黄道光の研究號)

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 歸朝の挨拶 (黄道光の研究號). 天界 1933, 13(149): 327-327

ISSUE DATE:

1933-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162408>

RIGHT:

近く位置してゐないのである。

K. Graff はこの Schmidt の観測を疑ひ、自ら1600米の高山で朝の薄明を出來るだけ廣く観測し、その結果として天文學的黃道光と、Schmidt の述べてゐるのに相當する明な地上の大氣の現象である氣象學的黃道光との關係を示してゐる。

Graff は更に續けて、この様に天文、氣象の兩現象に分つて考へると、今迄の黃道光の説明に何等の困難はない。この氣象學的現象は地理的赤道又は磁氣的赤道上に於ける大氣の隆起の假説だけで充分であつて、この現象は全然黃道上には存在してゐないから、太陽や月の引力の影響を考へる様なありさうもないことを假定する必要はないといつてゐる。

勿論 Schmidt の説にも嚴密な定量的な物質的基礎があるのではない。尚ほもつと多くの観測が必要である。

---

## 歸 朝 の 挨 拶

去る八月11日早朝、私は米國郵船 President Jackson 號で、横濱着、其の翌12日午後、京都へ歸着しました。五月に出發して以來、殆んど3ヶ月。誠にあはたどしい旅行ではありましたが、カナダのギクトリヤ、バンクーヴ兩市を始め、米國に入つて、シカゴ、ボストン、ニウヨーク、ワシントン、ピッツバーグ、シンシナチ、ロスアンゲレス、シャトル等の市々を遍歴し、短時日の割合にも拘らず、實に多くの事を見たり聞いたりして歸りました。旅程は豫め「天界」第145號に掲げた A, B, C, 三案の、何れでも無く、むしろ、D 案とか、E 案とか、言ふべきものとなりました。従つて、絶えず忙しく、落付かないで、手紙もロクに書かず、通信も怠り勝ちで、國內國外の知人朋友たちに御迷惑をかけたことも多大でした。ソロソロ土産話をくり擴げて、御わびの代りと致します。

(1933, 8, 15)

山 本 一 清